LIBRARY INFORMATION

Tableaux historiques de l´Asieより「1825年当時のアジア図」

目　　次

本学創立当時の「入學者心得」……………………………………………………………………（2）
石浜純太郎博士が入学された頃…………………………………………………………………（3）
図書館で過ごす時間………………………………………………助教授　田邉　欧（4）
第12回石濱文庫記念学術講演会案内……………………………………………………………（5）
石濱文庫について…………………………………………………教授　　橋本　勝（6）
石浜純太郎博士主要著作物………………………………………………………………………（7）
石浜純太郎博士年譜略……………………………………………………………………………（7）
東洋学者クラプロート（Klaproth）の著述について…………教授　　橋本　勝（8）

大阪外国語大学附属図書館　1998.11.2

第11号

授業料領收證

學生 石原純太郎 納

納額 自大正十一年四月至大正十二年三月 壹學年 金五拾圓也

領收分納	分納金額	納付期日
大正十一年四月十五日 第一學期分	金拾五圓也	四月十五日ヨリ同月二十日マデ
大正十一年九月十四日 第二學期分	金貳拾圓也	九月十五日ヨリ同月二十日マデ
大正十二年一月十日 第三學期分	金拾五圓也	十月十五日ヨリ同月二十日マデ

大阪外國語學校主任收入官吏
大阪外國語學校書記 加藤富松

領收證書

第 號 大正十一年度 石原純太郎 納

學校及圖書館會計部歳入經常部 學校及圖書館 諸收入 入學料

但入學料

一金貳圓也

右領收候也

大阪外國語學校主任收入官吏
大正十一年四月 日 大阪外國語學校書記 加藤富松

一年間學資概算

一、授業料	五〇、〇〇〇
一、校友會費	約 八、〇〇〇
一、行軍及修學旅行費	一〇、〇〇〇
一、圖書費（教科書、及參考書）	二〇、〇〇〇
一、食費（十ヶ月分）	三〇〇、〇〇〇
一、學用品費（仝上）	四〇、〇〇〇
一、被服費（服、外套、脚袴、附屬品トモ）	八〇、〇〇〇
一、雜費	三五、〇〇〇
計	五四三、〇〇〇

大正十一年四月

大阪外國語學校

制服	折襟脊廣	羅紗、メルトン、スコッチ、セル	ネズミ
襟章	盾形アーム	七寶	濃紺
釦	本校徽章ヲ附シタルモノ	ネリ	ネズミ
制帽	海軍帽	羅紗	ネズミ
帽章	本校徽章	金モール	金色
カラー	ソフトダブル	任意	白
ネクタイ	任意	任意	任意
同上ピン	CMMHEFDRSノ字	七寶	銀地紺字
靴	任意	任意	任意
外套	開キ襟	羅紗、メルトン、スコッチ	黑
脚袴	卷脚袴	任意	カーキ色
徽章	O (osaka) L (linguae, lingvoj) 二字ヲ組合ス		
襟章ノ文字	EX ORIETE LUX ET PAX		
夏期ニハ左ノ略服ヲ着用スルヲ得			
	制式	品質	色
服	立襟	リンネル、セル、小倉	ネズミ、白、霜降
釦	本校徽章ヲ附シタルモノ	任意	任意
帽子	麥稈帽、ヘルメット		任意
外套	開キ襟	クレバネット	茶

石浜純太郎博士が入学された頃

—石濱文庫の中に散見される本学創設当時の「入學者心得」と「領収證」等（当時の状況を知ることのできる貴重な資料）—

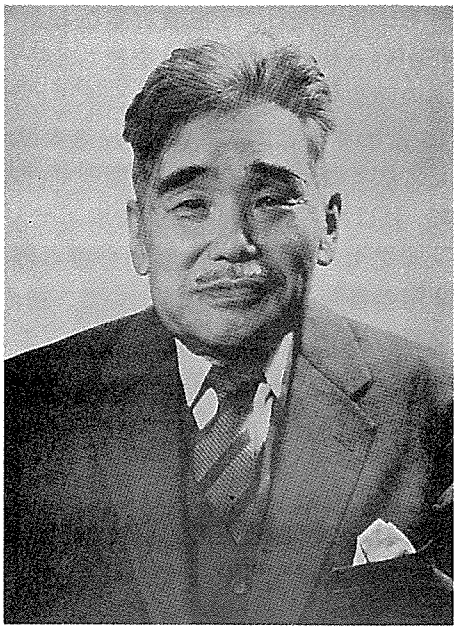
本学の前身大阪外国語学校は、実業家の亡夫の遺志を継いだ林蝶子女史が寄付した100万円を基に、天王寺区（当時、東区）上本町八丁目の旧天王寺中学校の跡地を買収して創設され、大正11年（1922年）4月15日に第1回入学式が行われた。開校時は支那、蒙古、馬来、印度、英、仏、独、露、西の9語部、学生定員200、教員は教授13、助教授3であった。第1回の入学試験の志願者数は1344人、合格者は本科生240、選科生1人、委託生14人の計255人、競争率は平均5.3倍の激戦であった。その選科生の1人が蒙古語部の石浜純太郎博士であった。写真は、石濱文庫の整理中に見つかった先生の入学料と授業料の領収書で大変貴重なもの。当時、米10kgが3円4銭、入浴料は6銭、新聞購読料は1円20銭、新聞社の給料が50円ぐらいの時代であったから、入学料の2円、授業料の50円はかなりの高額であった。その他に「入学者心得」にある1年間の学資概算では、授業料を含め、図書費、食費、学用品、衣服費など合計543円とあり、官立学校としては珍しい背広とネクタイの制服が「ハイカラ」とか「チンドン屋」とか巷の話題となった「背広の時代」の外語生の親の負担の大きさが推察される。（『大阪外国語大学70年史』、『大阪外国語大学70年資料集』等参照）。

【解説：附属図書館長　岡本　武】

入學者心得

一、四月十五日マデ入學料金貳圓ヲ本校會計課ニ納付スベシ
二、期日マデニ入學料ヲ納付セサルモノハ入學許可ヲ無効トス
三、四月二十日マテニ在學證書、履歴書、戸籍謄本、中等學校ノ卒業證書（檢定ニヨリ資格ヲ得タルモノハ其證明書）ヲ提出スベシ
　備考　卒業證書ハ照合ノ後ハ返戻ス、在學證書ハ折ルヘカラス
四、四月十五日入學式擧行ス午前八時マテニ出校スヘシ
五、既ニ指定シアル志望語部ハ如何ナル理由アルモ變更スルコトヲ許サス
六、授業料納付期間及分納額ハ左ノ如シ
　第一學期　金拾五圓　自四月十五日至同月二十日
　第二學期　金貳拾圓　自九月十五日至同月二十日
　第三學期　金拾五圓　自一月十五日至同月二十日
　但シ休日ニ當ルトキハ順次繰下ク
七、校友會費ハ在校中ノ校友會費ノ内金十三圓ヲ入學ノ際本校會計課ニ納付スヘシ
八、授業料、校友會費ハ納付期日内ニ父兄ヨリ直接本校會計課宛送付スルモ差支ナシ
九、制服（夏服）ハ左ノ規　據リ五月十五日迄ニ必ス調製スヘシ

制式品質色



石濱純太郎先生の近影

図書館で過ごす時間

地域文化学科助教授　田　邊　　欧

図書館通いをした時期がこれまでに2度ある。最初は高校の頃だった。受験勉強をするわけでも、宿題を片付けるわけでも、また特別に魅せられた本を読むためでもなかった。放課後、すぐに帰宅せねばならぬ用さえなければ、足はふらふらと市立図書館へと向かった。小さな図書館だったが、蔦の絡まる石造りの古い建物で、入り口の扉はけっこう重かったのを憶えている。まず、狭い急な階段を上って2階の閲覧室に入り、空いていれば窓際の席をとった。そしておもむろに筆箱とノート、それに教科書を取り出して、宿題をする態勢を整えはするものの、たいていは何もせずにぼおっと窓の外を眺めるか、周りの人を観察していた。普段の日は閉館時間まで2時間少々しかなかったから、ぼんやりしているとあっという間に時間は過ぎて、何もせずにそのまま帰ることが多かった。日曜日は朝から夕方までほぼ一日中いたから、午前中は一応勉強に励み、午後はいつものように無為の時間を過ごすのだった。だが、この無為の時間のことが今でも一番印象に残っている。

ちょうど先日、十五夜と重なるように金木犀の花がいっせいに甘い香りを放ち始めたとき、ふとあの図書館の窓際にあった金木犀のことを思い出した。わずかに開けた窓から、金木犀の香りが、さして広くないが天井の高い閲覧室に流れ込んできて、私はたちまちその匂いに酔ってしまった。「キンモクセイってどんな漢字を書くのかしら」と、1階の書架の植物事典を引いて、初めて金木犀の他に、白い花が咲く銀木犀があることを知った。たわいもないことだが、こんな小さな新しい発見が嬉しくて仕方がなかった。また、ずっと閲覧室に座っているのが退屈になると、階段の踊り場に貼ってあるいろいろな展覧会のポスターを見たり、書架の本を目的もなく手に取ってパラパラとページを繰り、興味をそそられる本だと、薄暗いのに平気で床にしゃがみこんでずっと読み続けた。でも借りて帰ることはほとんどなかった。要するに私は、そこで過ごす時間、日常の喧騒から解き放たれた空間が、この上もなく好きだったのだと思う。

2度目の図書館通いは、デンマークに2年半ほど暮らした時だった。デンマークの図書館は、大きく分けて王立図書館、大学図書館、中央図書館、そして市立図書館に分類されるが、私が足繁く通ったのは、町の中心部にある旧大学図書館だった。日常授業を受けるのは市の中心部から離れたコペンハーゲン大学アマア校舎で、そこには新図書館があったが、だだっ広いばかりで落ち着かず、私にはもう一つ馴染めなかった。王立図書館は、17世紀創立と歴史も古く、一般蔵書の他にさまざまなコレクションを有していて、貴重本の宝庫だったが、まるで博物館を訪ねるような感じで、そこに通うという気持ちにはなれなかった。その点、旧大学図書館はしごく居心地がよかった。閲覧室は、ちょうど高校時代に通った市立図書館ほどの小さな部屋で、天井がやたら高く、窓は中庭に面していて町中とは思えぬほど静かだった。ここに保管されている本は1960年以前のものばかりだったので、借りにくる人はたいていは研究者か学生だったが、閲覧室で本を読んだり、調べものをする人の顔触れはいつも決まっていた。次第に私も彼らの仲間入りをすることになったが、よく見ると、閲覧室の常連がみな研究熱心なわけではなかった。中には私のように、飽くことなく窓の外を眺めている人もいれば、昔の写本や美術書を実にゆっくりとめくっている人もいた。どこかしら、午睡をゆったりと楽しんでいるような雰囲気すらあった。

北欧の言葉は、外国ではほとんど需要のないマイナーな言語だから、一般書であってもびっくりするほど値が高い。たいがいの人は本は買わずに借りて読むものと心得ている。だから、図書館は驚くほど充実している。各々の図書館の連係もしっかりしていて、例えば王立図書館と大学図書館は同じオンラインシステムで繋がっており、本の予約も1ケ所で済ませられる。別の図書館からの取り寄せも迅速である。だが、こうした最新の機能を備えていく反面、日常の世界から隔絶された空間も大切に保持している。そこにはまだ静謐な時間が流れている。

目下、私達の大学図書館の課題は、いかに機能的に運営していくかに重点が置かれている。検索

コンピューターの台数を増やすこと、専門性を充実させること、オンラインシステムを拡張すること、本の紛失を防ぐ策を講じること、書庫のシステムを改善することなど、確かに第一義的な問題ばかりである。しかしその一方で、図書委員として本の選出に関わっていると、ときに、どの専攻分野にも直接関係しないが、それでいてたまらなく魅力的な本に出くわすことがある。そんなとき、この本は何の目的もなく図書館にやってきて、漠然と時を過ごしているなかで出会う本なんだろうなと想像する。そして、2階か3階にゆったりと座れるソファーがあったらなあと夢想するのである。

平成１０年度　大阪外国語大学

第１２回石濱文庫記念学術講演会

入場無料
申込不要

◆日時／平成１０年１１月７日（土）午後１時～４時
［午後１２時３０分開場　午後１時開演］

◆場所／千里ライフサイエンスセンター・ライフホール
（北大阪急行・地下鉄御堂筋線千里中央駅北出口すぐ）

私　の　旅
作　家　石浜　紅子

1963年生
祖父は、西夏文字を解読した東洋史学者の石濱純太郎氏（本学所蔵石濱文庫は氏の旧蔵書）で、父親は作家の石浜恒夫氏。
現　在　エッセイスト、イラストレーター、舞台衣装デザイナー
著書等　・海よ私はくじけない　（光文社）
・いのちのうた（大阪市環境局）
・わたしのシャングリラ（ビレッジプレス）
他多数

江戸時代における漢籍の輸入
関西大学名誉教授　大庭　脩

1927年生
1953年　龍谷大学大学院東洋史研究科修了
聖心女子大学助教授を経て
1960年　関西大学文学部助教授
1965年　関西大学文学部教授
関西大学東西学術研究所長
現　在　関西大学名誉教授
著書等　・秦漢法制史の研究（創文社）
・江戸時代における中国文化受容の研究（同朋舎出版）
・漢籍輸入の文化史（研文出版）
他多数

コータンと大乗仏教
大阪外国語大学助教授　森　茂男

1948年生
1974年　大阪外国語大学ペルシア語学科卒業
1979年　京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士課程単位修得退学
現　在　大阪外国語大学助教授
著書等　・梵字大鑑（共著）（名著普及会）
・日本オリエント学会30周年記念オリエント学論集（共著）（刀水書房）
・中東をめぐる諸問題（共著）（晃洋書房）
他多数

「石濱文庫」について

地域文化学科教授　橋　本　　勝

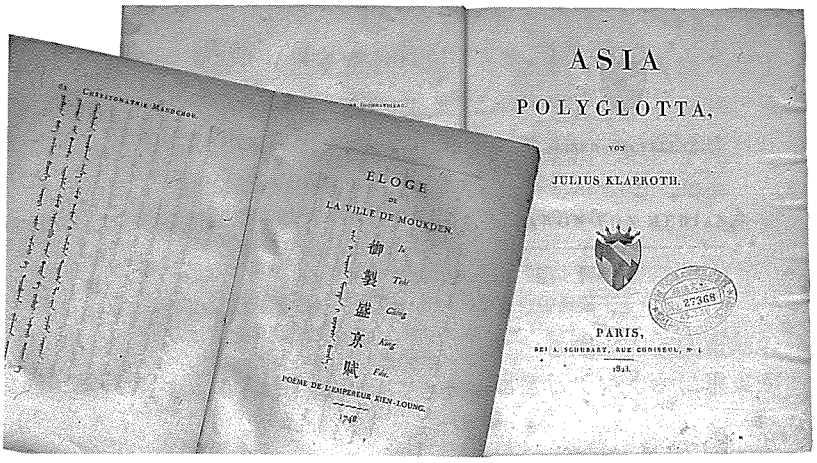
本学所蔵の「石濱文庫」には和漢書、洋書、雑誌併せて約四万二千を越す蔵書が収められている。その分野も遥か古今東西に広がり蒙古、満州、ウィグル、西蔵、西夏語等々の諸文書は、特に貴重である。経典、拓本類も可成りの数に達する。個人の蔵書としては真に厖大なものであり、よくぞこれ程まで蒐集されたものだと感嘆するばかりである。

石浜純太郎博士の博覧多識は、その厖大なる蔵書からも充分に我々の窺い知る所であるが、その中心は、勿論、東洋学関係にある。特にロシアで出版された東洋学研究に関する学術的に重要な著書、紀要、雑誌類は、当時に於ても入手困難であったと思われるものが少なくなく、例えば当時、東部ロシアの東洋学の一拠点であったウラジオストクに於て出版された文献資料もなかなか貴重である。

博士の著書は、その数に於て決して多いとは言えないが、その内容には、やはり学識の広さ、深さそして厳しさが一貫して流れている。御専門は、御存知の東洋史学であるが、言語学の方にも強い関心を示され東洋諸言語の研究に関する内外の文献類も多く残されている。東京帝大在学中筆録された講義ノート類も残され、中には曽て「ウラル・アルタイ説」を唱えた言語学者、故藤岡勝二氏の講義録が見られるのも興味深い。また、日本語を「ウラル・アルタイ語族」と最初に関係づけようとしたドイツの東洋学者クラプロート（Julius Heinrich Klaproth）の『アジア・ポリグロッタ』（Asia Polyglotta, Paris, 1823）も本文庫に所蔵されている。

博士は、本学の前身、大阪外国語学校の元ロシア語講師であったネフスキー（Nicolas Nevsky）氏と親交厚く、彼を西夏語研究に没頭するに至らしめたのは、他ならぬ石浜博士であったと聞く。尚、ネフスキー氏は、大阪東洋学会（大阪外国語学校内）より「西夏文字抄覧」（『亜細亜研究』第四号、大正15年）を出し、同書で博士は、序文に代えて「西夏遺文雑録」を書かれている。博士は、西夏語解読への道筋をつけた正に日本に於ける西夏学の草分けでもあった。

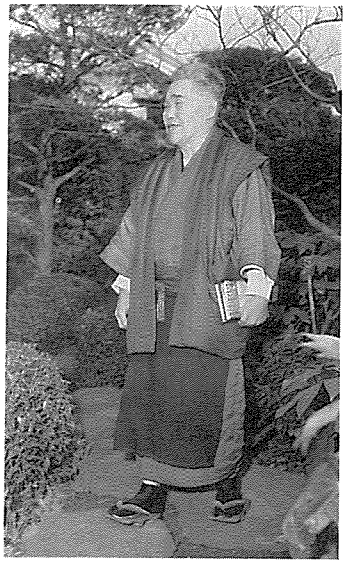
同博士の著書の一つに『東洋学の話』（創元社、昭和18年）がある。これは、元々、御自身が方々で講演されたものに補正を加えて一書にまとめ上げたものであり、一般読者にも読みやすく書かれているが、言わば「石浜学」の一端が軽妙に描かれて居り、その学風を知る上で真に興味深い好個な書物である。そこには「敦煌石室の遺書」、「胡語経典の話」、「西域出土の西蔵本」、「西夏語研究の話」等々が収められ、東洋学の雄大な広がりを眼前にする思いがある。「石濱文庫」は、内外の学者・研究者の注目する所になって既に久しい。「石濱文庫」は本学ばかりでなく内外の多くの東洋学研究者に大きな便宜を与えてきている。大阪外国語大学所蔵『石濱文庫目録』は、昭和54年に刊行されているが、なお未整理の満・ウイグル・蒙・西蔵文の経典、拓本や内外の学者、研究者からの書簡類等もかなりありその整理が急がれる。何はともあれ本文庫は正に本学に於ける「東洋学」の一大宝庫と言っても過言ではない。



石浜純太郎博士主要著作物

敦煌石室の遺書／石浜純太郎著．ーー　石浜純太郎，1925.
満蒙言語の系統／石濱純太郎［著］．ーー　岩波書店，1934.
(岩波講座東洋思潮；．東洋言語の系統).
大阪漢學大會研究報告／石濱純太郎編．ーー　典籍之研究社，1938.
富永仲基／石濱純太郎著．…　創元社，1940．ーー（創元選書；62).
浪華儒林伝／石浜純太郎著．ーー　全国書房，1942.
支那學論攷／石濱純太郎著．…　全国書房，1943.
東洋學の話／石濱純太郎著．ーー　創元社，1943.
大東亞語學叢刊／石濱純太郎，川崎直一緒集．‥　朝日新聞社.
世界の言語／石濱純太郎［ほか］訳；泉井久之助編．　朝日新聞社，1954

東洋學叢編／静安學社編．ーー　刀江書院，1934.
東洋學論叢：石濱先生古稀記念／石濱先生古稀記念會編，1958.



石浜純太郎博士年譜略

明21・8　大阪市北区堂島において父豊蔵、母平山氏カヤの長男として誕生
明34・4　大阪府立市岡中学に入学、同校第1回入学生。同期に小出楢重、田宮猛雄、信時潔の諸氏あり
明41・8　第一高等学校において東京帝国大学受験す。試験の結果の発表なきまま坪内逍遙につき英文学を修めんと思い、早稲田大学受験を企つるも時既に遅くして果さず。東京帝国大学文科大学支那文学科に入学し岡田正之教授につく。8月の受験者40数名中、理科亀田豊治朗氏とのみ許可さる。
明43・4　家督を相続す。丸石製薬合名会社社員となる
明44・7　東京帝国大学卒業。卒業論文「欧陽脩研究」（漢文）同期の国文学科卒業生にSenge Elisséeff氏あり
大4　この年、西村天囚氏の誘により大阪の文会「景社」に入り、長尾雨山、籾山衣洲、武内義雄らの諸氏と相知る。
大5・7　宇治花屋敷において、京都の文会、麗沢社と景社との第1回連合会あり内藤湖南（虎次郎)、狩野君山（直喜)、青木正兒、岡崎文夫、神田喜一郎、小島祐馬、富岡謙蔵、佐賀東周、那波利貞、福井貞一、藤林広超、本田成之らの諸氏と初めて合う。
大11・4　大阪外国語学校蒙古語部へ選科委託生として入学
大13・3　大阪外国語学校第二学年修了
大13・7　京都帝国大学教授内藤虎次郎氏に随伴し、内藤乾吉氏と共に東洋語書籍調査のため、ヨーロッパにむけ紳戸を出帆す
大14・2　ヨーロッパより帰朝す
昭2・9　浅井慧倫、笹谷良造、高橋盛孝、Nicholas Nevskyの諸氏と静安学社を発起し幹事となる
昭11・6　静安学社幹事を解かる
昭17・2　大阪言語学会を創立発会す
昭28・11　日本西蔵学会会長に推薦さる
昭29・11　大阪の生覚を顕彰し大阪の教育の振興に貢献したる功績に対し、大阪府より「なにわ賞」を受く
昭32・3　著書、支那学論文等により関西大学より文学博士の学位を受く
昭43・2　永眠す

なお、大正15年以降、関西大学、大阪高等学校、鶴谷大学、京都大学、大阪外国語大学（専門学校を含む)、天理大学、帝塚山学院短期大学で教鞭を執る。

東洋学者クラプロート（Klaproth）の著述について

地域文化学科教授　橋　本　　勝

ユリウス・ハインリッヒ・クラプロート（Julius Heinrich Klaproth）は、1783年10月11日にベルリンに生まれた。父は、マルティン・ハインリッヒ・クラプロート（Martin Heinrich Klaproth）と言いドイツの著名な化学者であり、ジルコン、ウラン、チタン化合物等を発見した。ベルリン大学の最初の化学教授となった人物である。その子クラプロートは、独学で中国語を修め1802年に「Asiatisches Magazin」誌を創刊した。これは、彼の才能豊かなることを識者に知らしめ注目することになった。1805年にはロシアからの中国派遣使節団に加えられた。この間にシベリア地方でその諸民族の調査を行なった。キャフタに至りそこでモンゴル語を習い多くの満州、中国、チベット、モンゴル語の文献を蒐集し1906年モンゴルに入り庫倫（現在のウランバートル）に達した。クラプロートは19世紀のヨーロッパの中国学に多大な貢献をした学者と言えるが、彼は、中国にとどまらず広くアジアの諸民族の言語に対する卓越した実用能力を備えていた。その成果の一つは『アジア・ポリグロッタ』（Asia Polyglotta, Paris, 1823）に集約されている。本書は、「石濱文庫」に所蔵されているが、この書で彼は、初めて日本語が“ウラル・アルタイ語族”に関係あることを提唱した。現在ではこの著作の学問的価値が高いとは言えないが、アルタイ語研究史の中で歴史的価値を持っていることは強調されなければならない。日本語、アルタイ諸語、バスク語、コーカサスの諸言語等々の知識を有し当代世界の大変な博言家であったことは疑いない。又、イルクーツクでは伊勢の漂流民、大黒屋光大夫一行のひとり新蔵について日本語彙を作った。帰国後コーカサス地方を調査旅行し後に『1807-1808年コーカサス・グルジア旅行』（Reise in den Kaukasus und nach Georgien in 1807 und 1808, 2vols., Berlin, 1812, 1814）。又、歴史地理の分野で特筆すべきは、『アジア歴史地図』（Tableaux historiques de l'Asie, Paris, 1806）であろう。この書物はアケメネス朝ペルシャのキュロス王の時代より当代に至るまでの歴史地図であり27枚の地図から成っている。本書は「石濱文庫」に収められている。又、『満文選集』（Chrestomathie mandchou, Paris, 1828）は彼の専門領域の一つ満州学を反映した一書であるが、これも本文庫に所蔵されている。その他、注目すべき著作の一つとして『アジア論集』（Mémoires relatifs à l'Asie, Paris, 1826～1828）を挙げなければならない。本書により彼の研究がいかに広大な分野に及んでいたかを見てとることができる。彼は1810年リトアニアのヴィルナ大学のアジア語学校の設立に参加した後、ロシアを去って1815年の末にパリに赴きプロシャ政府から教授の称号を得てパリで研究と出版活動に精励したが、1835年8月同地で死没した。【表紙写真解説】

◆編集後記◆

※石浜純太郎先生は、今から76年前35歳の時、本学に選科生として蒙古語部に入学された。その当時の資料を今回掲載するとともに、本学石濱文庫を受け入れてから28年、先生の死後30年となる今年、その文庫を記念して第12回学術講演会を開催します。奇しくも去年夏に夏漢字典　李範文編者．中国社会科学出版社（本学所蔵・請求記号821.2-199）約1,350頁の書籍が出版されています。この書籍は、石浜先生が研究されていた西夏の文字解読字典であり、先生と親交が深かったネフスキー、王静如、西田龍雄氏の名前も出ています。石濱文庫は、現在でも非常に多くの方々に利用されていますが、今だ未整理のものが多数あり（特に目録類、書簡、拓本、抜刷等）、その整理が急がれます。さらに、附属図書館では貴重図書・拓本類のマイクロ化、石濱文庫目録の電子化を早期に考える必要性に迫られています。今後とも図書館業務に対するご理解とご協力をお願いします。

（専門員　岸本　晴広）

大阪外国語大学附属図書館報《Library Information》　第11号

１９９８年１１月２日発行
発行　大阪外国語大学附属図書館　〒562-8558　大阪府箕面市粟生間谷東８-１-１
電話　０７２７-３０-５１１１（代表）